東京学芸大学リポジトリ
Tokyo Gakugei University Repository

特別支援学校におけるキャリア教育とキャリアガイダンスの展望

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2020-04-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 李, 受眞, 橋本, 創一, 林, 安紀子, 杉岡, 千宏, 山口, 遼, 廣野, 政人, 日下, 虎太朗, 尾高, 邦生 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2309/152460

東京学芸大学紀要　総合教育科学系　**71**: 663－668，2020.

特別支援学校におけるキャリア教育とキャリアガイダンスの展望

李　受眞*1・橋本　創一*2・林　安紀子*2・杉岡　千宏*1・山口　遼*3・
廣野　政人*1・日下　虎太朗*1・尾高　邦生*4

特別支援教育・教育臨床サポートセンター

（2019年9月17日受理）

1．特別支援教育におけるキャリア教育

障害のある子どもや天才児などの特別な（exceptional）人のための教育を改善することを目指した大規模な国際的な専門家によるNPO組織であるThe Council Exceptional Childrenでは，「キャリア教育」について，有意義で満足できる仕事生活（work life）を送るための学習を通じた経験全体であるとし，仕事（work）とは，自分かつ／または他者のために利益を生み出すための意識的な努力であり，さらに，キャリア教育は学校の教育内容全体，さらにはそれを超えてさえ，浸透させるべきものであるとしている（Brolin, 1997）[1]。国立特別支援教育総合研究所（2010）[2]では，平成20・21年度「知的障害教育におけるキャリア教育のあり方に関する研究」において，この考え方を受けて「働くこと」を就労だけに限定せず，家庭生活や地域生活において「何かをすることによって人に認められ，人の役に立つこと」と広義に捉えている。次いで，狭義のキャリア教育として，後期中等教育または成人サービス機関，雇用された最初の数年間までの機関において，職業教育，進路指導や自己決定，生活・余暇・QOLの向上ににかかわる指導・支援を行う場合を「移行教育」，最も狭義のキャリア教育として，職業準備教育・特定の職種に関わる技能や知識の習得をする「職業教育」を挙げている。そして，広義，狭義，最も狭義のキャリア教育がそれぞれ補完しあうことで，さらにキャリア教育の研究や実践が深化していくと指摘している（国立特別支援教育総合研究所，2011）[3]。

このようなキャリア教育における国際的背景を踏まえながら国立特別支援教育総合研究所（2011）[3]では，「キャリアプラニング・マトリックス」を作成し，各学部における4能力領域（「人間関係形成能力」，「情報活用能力」「将来設計能力」「意思決定能力」）に基づくキャリア発達段階をまとめ，指導内容と形態をまとめ，実践モデルを提案した。研究モデル事業による教育実践の成果において，指導内容・指導方法の一貫性，教員間における共通理解，そうした様々なツールを用いることの有用性は検証されたが，児童生徒の個人差には注目されておらず，その具体的な対応や方策について言及が少ない。児童生徒の多様性により，キャリア支援においても個に応じた指導・支援とその方策が求められている。

2．発達障害・知的障害のある児童生徒の自己理解を育むキャリア教育における授業プログラム

自己理解には知的発達の程度が影響を及ぼす。しかし，知的障害児の自己理解は，単純に生活年齢や精神年齢のどちらかに規定されるのではなく，相互に影響する可能性がある（小島，2010）[4]。知的障害のある人の自己概念の形成は，知的障害のある人に対する生きる力の教育において無視されることなく，その重要性を多くの研究が指摘している（大山・今野，2002[5]；原・内海・緒方，2002[6]；小島，2007[7]）。そして，自己理解とは自分自身を様々な面から確認し，客観視できるようになることであり，自分の強みや弱いところを確かめることは，適切なキャリア選択につながると

＊1　東京学芸大学大学院 連合学校教育学研究科（184-8501　小金井市貫井北町4-1-1）
＊2　東京学芸大学 特別支援教育・教育臨床サポートセンター（184-8501　小金井市貫井北町4-1-1）
＊3　東京学芸大学大学院 教育学研究科（184-8501　小金井市貫井北町4-1-1）
＊4　順天堂大学

考えられる。小島（2014）[8]は渡辺（2013）[9]によるキャリアという語がもつ３つの観点（「個別性」,「空間的広がり」,「時間的経過」）を参考に，８つの領域にわたる自己理解の支援のための授業プログラムを試みた。その８つの領域とは，①感覚を通しての自己への気づき，②自分の良さへの気づき，③多様な自己への気づき，④過去または未来の自分からの自己理解，⑤理想自己の形成，⑥他者との関わりを通して深める自己理解，⑦先輩，理想の人から自分を見つめる，⑧進路学習・実習を通しての自己理解で構成されている。この授業プログラムはライフキャリアを基盤とし具体的なプログラムで構成され，それぞれの自己理解の発達の領域を確認しながら実践することができる。一方で，誰がいつどこで実践するのかについては明記されていない。このようなことを具体的かつ実際的に明示することが，今後のキャリア支援をより具現化していくものと考える。

３．生徒指導・キャリア教育

特別支援学校の小学部・中学部学習指導要領(2009)[10]において，指導計画の作成にあたって配慮すべき事項として中学部における「ガイダンス機能の充実」が明記されており，児童生徒の進路計画の重要性について示されている。平成31年２月に公示された特別支援学校高等部学習指導要領[11]では「職業」教科の指導計画の作成に当たって配慮すべき事項に関して，生徒一人一人のキャリア発達を促していくことを踏まえ，発達の段階に応じて望ましい勤労観や職業観を育むとともに，自己に対する理解を深め，自らの生き方を考えて進路を主体的に選択することができるよう，将来の生き方等についても扱うなど，組織的かつ計画的に指導を行うことが挙げられている。また，学習指導要領の中に，キャリアカウンセリングが明記されるようになったことを受けて，従来おこなわれていた進路指導（相談）から，受容的，循環的，開発的な進路指導を行うことにより，主体的な進路選択能力に基づいた進路の選択と決定を可能にすることをねらいとしている。宮城（2002）[12]によれば，キャリア教育のすべてのプロセスにおいて，キャリアカウンセリングを行うことが重要であると指摘している。キャリアカウンセリングには集団を対象とした形態と，個々の生徒のニーズに応じてその都度行う形態といった様々なものがある。障害のある生徒の場合，支援ニーズが多様であり，個別指導・支援が欠かせない形態であり，かつ有効であると考えられる。

４．個別のキャリアガイダンスの有効性について

知的障害特別支援学校の高等部では軽度知的障害のある生徒が増え続けており，加えて，支援ニーズの多様性・複雑さへの対応が難しくなっている。特に，小中学校の通常学級を経由している者が多く，障害受容の難しさや様々な学校不適応などが課題とされている（国立特別支援教育総合研究所，2012）[13]。仲野ら（2018）[14]は関東地域の高等学校と全国の知的障害特別支援学校（高等部）の養護教諭を対象に，心と行動の不調を抱える生徒とその問題，スクールカウンセラーの配置状況に関する実態調査を行った。その結果，知的障害特別支援学校高等部では，「不登校・登校しぶり」「心気的訴え」を示す生徒らが在籍する学校が70%を超えていたが，スクールカウンセラーの配置率は，高等学校が８割程だったのに比べ，特別支援学校高等部は３割程であったことが報告されている。

就労に向けた学校全体のキャリア教育は，カリキュラム開発やユニークなプログラムが試行されて充実する一方で，個に応じたキャリアガイダンスは不充分さが目立つことが指摘されている（尾高，2020）[15]。国立特別支援教育総合研究所（2011）[3]はキャリア教育における課題の一つとして，キャリアカウンセリングの実施をあげており，個別指導における自他の理解を深めることの重要性をあげている。つまり，一斉指導や授業つくりの実践研究は盛んにみられるものの，授業外を含めた一人ひとりに応じた個別の進路相談やキャリアガイダンスなどの実践報告（知的障害の特性や発達状況などに個別アプローチする事例検討）は少ない。

５．キャリアガイダンス・プログラムの開発に向けて

これまで，自己理解や自尊感情のキャリア支援に関して，特別支援教育における明確にアセスメント（ツールの使用やプログラム化された形式）を行なったものはみあたらない。

そこで、知的障害と聴覚障害特別支援学校高等部（各１校）の生徒ら10名（知的障害のある生徒６名，聴覚障害のある生徒４名）を対象に，新たに開発された自己理解に基づくキャリアガイダンス・プログラム（李ら，2019）[16]を２セッションにわたり試行的に実践した。実践者は，対象生徒らの担任教員で，個別面談の形態で２セッション実施した。

第１セッションは，アセスメントと本人の気づきを促すセッションと位置づけ，「自己・他者への気づき」

とし，自尊感情[17]，重要な他者[18]，ASIST学校適応スキルプロフィール[19]，他者意識[17]への質問項目（表1）について答えてもらった。これらは，障害者の自己理解・他者理解・他者意識・障害特性に関連した支援ニーズを測定・把握する尺度であり，多くの研究知見から活用による成果が見出されている。回答後は，自身の回答について確認し，それをもとに次回セッションまでに深く考えてくることなどを予告した。

第２セッションでは，「本来感への認識・理解」とし，自己受容と他者受容（表2）について答えてもらった。表２の項目１～７が自己受容，項目８～15が他者受容に関する質問である。第１セッションと第２セッションの間隔は１週間～10日程であった。また，本プログラムを実践した教員に対して，対象の生徒ひとり一人について，同じ質問項目について担任教員からみた評価（他者評価の位置づけ）として回答してもらった。同時に，対象生徒の回答と教員による評価（回答）の両者について感想・意見を述べてもらった。

表１　第１セッションの質問項目の一部

自尊感情（9項目の内，3項目）	
1	自分のことが好きだ
2	自分にはいいところがたくさんある
3	自分は大切な人間だ
ASIST学校適応スキル（15項目の内，5項目）	
1	買い物や数学の問題などで、計算などは普通にできますか？
2	自分から進んで学習や仕事に取り組むことができますか？
3	ボール運動は普通にできますか？
4	課題や活動を最後までやり遂げられますか？
5	１つの活動が終わって次の活動へスムーズに移ることができますか？
他者意識尺度（11項目の内，3項目）	
1	他者の行動や顔を気をつけてみるようにしている
2	人の考えをいつも読み取ろうとしている
3	人の言葉と動きをいつも気にしている

表２　第２セッションの質問項目（自己受容・他者受容）

1	現在の自分を受け入れている
2	人は人，自分は自分だと思える
3	ありのままの自分で良い
4	物事がうまくいったとき，自分自身を自然に認める事ができる
5	自分の素敵なところを素直に良いと思える
6	物事がうまくいったとき，自分の努力を認める事ができる
7	自分の長所を素直に認める事ができる
8	他の人の長所を素直に認める事ができる
9	他人の喜びに共感できる
10	その人らしさを認める事ができる
11	他の人の素敵なところを認める事ができる
12	良いところも悪いところも含めて他の人を受け入れることができる
13	他の人のミスが許せない
14	他の人が自分と同じような考えでなければならない
15	その人はその人でいいと思う

その結果，第１セッション（図１）では，軽度知的障害生徒（事例A～F）の場合，自尊感情と他者意識の質問で「どちらかわからない」と選ぶ生徒が多かった。聴覚障害者（事例H～K）は全ての質問項目について答えられた。自尊感情得点とASIST適応スキル得点は，類似した傾向，または適応スキルの方が高い傾向がみられた。第２セッション（図２）では，軽度知的障害生徒はネガティブな側面への自己受容について全ての生徒がほとんどの項目に関して曖昧な答え（どちらかわからない）をしていることがわかった。この結果については，知的障害生徒はこれまでの経験の中でネガティブな自己に関して考える機会が不足していたことが推測される。一方，聴覚障害者の場合は一貫して自己受容より他者受容の方が高かった。これは，自分のことより他者のことの方を尊重していると考えられる。

本報告で示したキャリアガイダンス・プログラムの試行に関する知見は，知的障害と聴覚障害のある生徒に対して，事例的に実践したものから検証した。したがって，プログラムにおけるガイダンスの内容や手続き・方法，対象者の回答結果やセッションによる変化，回答内容の吟味など，多くの点で信頼性や妥当性について今後詳しく検証していく必要性があろう。その一方で，特別支援教育の中で自己理解・他者意識・障害認識などの視点に重点を置く新たなアセスメントの必要性と有用性が見出されたものと考えられる。キャリア教育への実際的な適用のためには，さらなる検討が必要である。

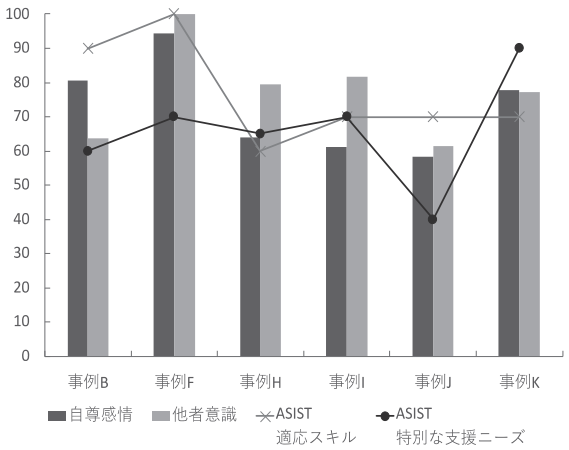

図１　第１セッションの質問項目の得点

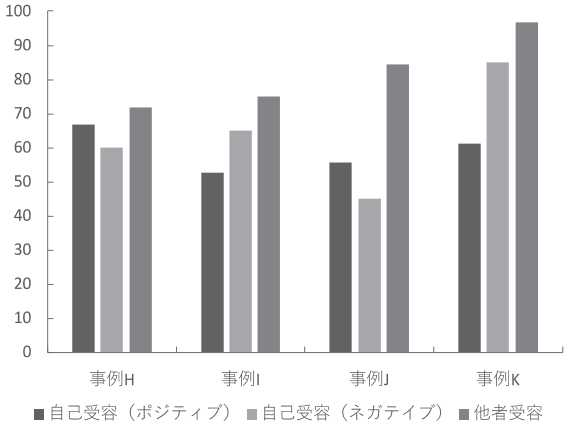

図２　第２セッションの質問項目の得点

６．引用文献

1） Brolin, D. E.: Life Centered Career Education: A Competency Based Approach. 5th Edition. The Council Exceptional Children. Arlington, VA., 1997.

2） 国立特殊教育総合研究所：知的障害教育におけるキャリア教育の在り方に関する研究―「キャリア発達段階・内容表（試案）」に基づく実践モデルの構築を目指して―（平成20年・21年度）．課題別研究報告書，2010.

3） 国立特別支援教育総合研究所：特別支援教育充実のためのキャリア教育ガイドブック―キャリア教育の視点による教育課程及び授業の改善，個別の教育支援計画に基づく支援の充実のために―．ジアース教育新社，2011.

4） 小島道生：知的障害児の自己概念とその影響要因に関する研究―自己叙述と選択式測定法による検討―　特殊教育学研究，48，1-11，2010.

5） 大山美香・今野和夫：知的障害児者の自己概念に関する研究知見と実践的課題―文献的考察を中心に―　秋田大学教育文化学部教育実践研究紀，24，53-66，2002.

6） 原智彦・内海淳・緒方直彦：転換期の進路指導と肯定的な自己理解の支援―進路学習と個別移行支援計画を中心に―．発達障害研究，24，262-271，2002.

7） 小島道生：知的障害児の自己の発達と教育・支援　田中道治・都筑学・別府哲・小島道生（編）発達障害のある子どもの自己を育てる―内面世界の成長を支える教育支援―．ナカニシヤ出版，12-27，2007.

8） 小島道生：発達障害・知的障害のある児童生徒の豊かな自己理解を育むキャリア教育　小島道生・片岡美華（編）ジアース教育新社，24-27，2014.

9） 渡辺三枝子：キャリア教育の理念と特別支援教育における今後の展望．発達障害研究，35，279-286，2013.

10） 文部科学省：特別支援学校の小学部・中学部学習指導要領，2009.

11） 文部科学省：特別支援学校高等部学習指導要領（平成29年４月公示・平成31年２月公示），2019.

12） 宮城まり子：キャリアカウンセリング．駿河台出版社，2002.

13） 国立特別支援教育総合研究所：特別支援学校（知的障害）高等部における軽度知的障害のある生徒に対する教育課程に関する研究―必要性の高い指導内容の検討―（平成22年～23年 度 ）．2012. http://www.nise.go.jp/cms/7,7041,32,142.html（2019年９月10日取得）

14） 仲野栞・橋本創一・三浦巧也・日下虎太朗・山中小枝子・李受眞：高等学校・特別支援学校高等部生徒のメンタルヘルスにおける養護教諭の役割と多職種連携．保健の科学，60，639-644，2018.

15） 尾高邦生：16章　障害児のキャリア教育・進路相談　橋本創一・三浦巧也（編）福村出版，2020.

16） 李受眞・橋本創一・廣野政人・尾高邦生：特別支援教育における自己理解に基づくキャリアガイダンスプログラムの試み．日本特殊教育学会第57大会，2019.

17） 李受眞・橋本創一・尾高邦生・廣野政人・堂山亞希：軽度知的障害者用の他者意識尺度の有用性に関する臨床心理学的検討．東京学芸大学教育実践研究支援センター紀要，15，23-29，2019.

18） 李受眞・橋本創一・春日井宏彰・前川涼・尾高邦生：成人期知的障害者における重要な他者への意識に関する調査―重要な他者へのポジティブ・ネガティブ感情の発達における―．東京学芸大学教育実践研究支援センター紀要，14，29-33，2018.

19） 熊谷亮・橋本創一・田口禎子・三浦巧也・堂山亞希・徳増由希子：発達支援の視点に立った学校適応スキルと特別な支援ニーズの検討：ASIST学校適応スキルプロフィールを用いた検討．発達障害研究，35，372-380，2013.

特別支援学校におけるキャリア教育とキャリアガイダンスの展望

Future perspectives of career guidance at special needs schools on career education

李　受眞[*1]・橋本　創一[*2]・林　安紀子[*2]・杉岡　千宏[*1]・山口　遼[*3]・
廣野　政人[*1]・日下　虎太朗[*1]・尾高　邦生[*4]

LEE Sujin, HASHIMOTO Soichi, HAYASHI Akiko, SUGIOKA Chihiro,
YAMAGUCHI Ryo, HIRONO Masato, KUSAKA Kotaro and ODAKA Kunio

特別支援教育・教育臨床サポートセンター

Abstract

Career education provided at special needs schools is overviewed and the necessity of career education, as well as development of its concrete programs, are discussed. Contents and forms of career guidance from the career development stage have been summarized by the career planning matrix based on the four ability domains, i.e. the ability to build human relationships, ability to utilize information, ability to design one's future, and ability to make one's decisions. However, how to deal with the diversity of individual student is not clearly suggested. On the other hand, the necessity to clearly indicate when and where the program to support students' self-understanding has been suggested. Whereas career education provided at the whole school has been improved, such as development of curriculums and unique programs, individual career guidance has not been improved sufficiently. Therefore, newly developed career guidance based on self-understanding was conducted on a trial basis with students with intellectual developmental disorders or hearing impairments, enrolled in the high school course of special needs schools. The results indicated that it is effective as an assessment method to provide self-understanding-focused career guidance in the early stage of career education programs for all the students. Further discussion is required for applying the guidance to practical use at schools from the perspectives of time, measures, and instructors.

Keywords: Special Needs School, Mild Intellectual developmental disorders, Self-esteem, Important others, Education of Career, Career Guidance Program

Department of Support Center for Special Needs Education and Clinical Pravtice on Education, Tokyo Gakugei University, 4-1-1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo 184-8501, Japan

*1 The United School of Education, Tokyo Gakugei University (4−1−1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo, 184−8501, Japan)
*2 Support Center for the Special Needs Education and Clinical Practice on Education, Tokyo Gakugei University (4−1−1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo, 184−8501, Japan)
*3 Graduate School of Education, Tokyo Gakugei University (4−1−1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo, 184−8501, Japan)
*4 Juntendo University

要旨： 本稿は，特別支援学校におけるキャリア教育の実践とまとめ，キャリアガイダンスの必要性とその具体的なプログラム開発について検討するものである。キャリアプラニング・マトリックスでは 4 能力領域（「人間関係形成能力」「情報活用能力」「将来設計能力」「意思決定能力」）に基づいたキャリア発達段階からの指導内容と形態がまとまっている。しかし，生徒一人一人の多様性に対応する手立てが不明瞭である。一方，児童生徒の自己理解の支援プログラムは，具体的に実践するための時間や指導の場（カリキュラムや授業など）を明確に示す必要性が示された。また，就労に向けた学校全体で取り組むキャリア教育は，カリキュラム開発やユニークなプログラムが試行されて充実している。その一方で，個に応じたキャリアガイダンスには不充分さが目立つ。そこで，特別支援学校高等部生徒（知的障害，聴覚障害）を対象に，新たに開発された自己理解に基づくキャリアガイダンスを試行的に実践した。その結果，自己理解キャリアガイダンスは，全体（一斉指導）で実践されるキャリア教育プログラムの初期段階に実施すべきであるアセスメント機能としての有効性が見出された。一方で，実際の学校実践への適用のためには，時間・方法・指導者などの点から，さらなる検討が必要である。

キーワード: 特別支援学校，キャリア教育，自己理解，重要な他者，キャリアガイダンス，生徒指導